

小説における受身の使用

—主語と行為者の有情性に焦点を当てて—

The Use of Passive Forms in Japanese Novels With a Focus on the Animacy of Subject and Agent

村上かおり

Kaori SUMI MURAKAMI

要旨

教室外での読む活動において、学習者が受身文を理解できることは重要である。本稿では小説に使われている受身文を拾い出し、主語と行為者それぞれの有情性で分類し、出現頻度を調べた。603個の受身を調べた結果、有情主語有情行為者受身文の相対度数は35.49%、有情主語非情行為者受身文は8.96%、非情主語有情行為者受身文は38.31%、非情主語非情行為者受身文は17.25%であった。

「日本語の受身は人間中心」と言われるが、今回の調査では行為者が有情の場合の主語には有情と非情の出現頻度の違いは見られなかった。一方で、行為者が非情の場合は主語も非情の場合が多いという結果になった。併せて受身文の主語と行為者の分析も行う。

小説には非情の受身が頻出していることから、学習者が楽しみのために読む活動がより良くできるようになるために、非情の受身の教育を再考する一助になればと考える。

【キーワード】 受身、有情、非情、小説、文脈

1. はじめに

受身は初級後半で教えられることが多い文法形式である。しかし経験的に見て、導入後の学習者の発話や作文での使用が多いとは言えず、学習が容易な項目ではないと感じる。学習者は教室の外で様々な形で日本語を使う活動をする。その中には楽しみのために小説を読むという活動も含まれている。その活動の中で受身文に遭遇したときに構成や意味を理解できることは重要である。

本稿の目的は二つある。第一に、日本語の受身の中で主語あるいは行為者が非情の場合に関する先行研究を振り返る。第二に、小説に使われている受身を主語と行為者それぞれの有情性によって分類して考察を加える。

分析の対象とした小説は村上春樹の短編集である。村上春樹の小説は40以上の言語に翻訳され(沼野2013)、世界中で読まれている。日本語学習者にも人気がある日本の作家で、学習者に日本語学習の目標を尋ねると「村上春樹の小説を母語への翻訳で読んだ。日本語で読めるようになりたい」とか「将来は翻訳者になって、村上春樹の小説を翻訳したい」という答えが返ってくるのがよくある。このことから、受身文の分析にこの作家の著作を選択することは意義があると考えられる。

2. 先行研究

2.1 日本語の受身

(1a) 山田先生は太郎君をいつも褒める。[能動文]

(1b) 太郎君は山田先生にいつも褒められる。[受身文]

日本語の動詞の受身は形式の上では「(ら)れる」がマーカーとなる。(1a)と(1b)は同じ事象を表した文で、この事象において山田先生は褒めるという行為を行う「行為者」であり、太郎君はその行為を受ける「対象」である。この時、(1a)と(1b)は同じ事象をそれぞれ異なる視点から述べたものである。(1a)は行為者である山田先生を主語として山田先生に視点を寄せて(高見2011)この事象を述べた文で、一方(1b)は行為の対象である太郎君を主

語として太郎君に視点を寄せて述べた文である。すなわち (1a) の能動文は山田先生について述べた文であり、(1b) の受身文は太郎君について述べた文である。

(2a) 青年は溺れそうになっていた少年を助けた。[能動文]

(2b) 溺れそうになっていた少年は青年に助けられた。[受身文]

(2a) と (2b) も同じ事象を表した文であるが、(1a) と (1b) 同様に、(2a) は行為者である青年の視点から事象を述べた能動文、(2b) は行為を受ける対象である少年の視点から述べた受身文である。

(3a)、(3b)、(3c) の場合、「警察」は感謝状を青年に贈るという行為を行う行為者であり、「青年」は対象者、「感謝状」は対象物である。(3a) は行為者である警察を主語にした能動文、(3b) は対象者である青年に、(3c) は対象物である感謝状の視点にそれぞれ寄せて述べている。

(3a) 警察は少年の命を救った青年に感謝状を贈った。[能動文]

(3b) 少年の命を救った青年は警察から感謝状を贈られた。[受身文]

(3c) 感謝状は少年の命を救った青年に警察から贈られた。[受身文]

このように、対象者、対象物それぞれに視点を寄せて受身文を作ることができるが、高見 (2011) は、(3b) のように対象者の視点に寄せた受身文は会話等でも用いられる普通の文であるが、これは話し手が人間である対象者には視点を寄せやすいためであり、それに対して無生物に視点を寄せた(3c) のような受身文は客観的で、ニュース等の報告文や書き言葉で用いられる文のように感じられると述べている (p.18)。

水谷 (1985) はこのような無生物を主語とした受身を「非人称主語の受身」と呼び、「欧文調で、歴史的にも西洋の影響をうけた新しいもの」であるとしている。そしてその特徴として「動作主にあまり関心がなく、動作主よりも動作の対象に対する関心が強」く、「書きことば的な文に多い」ことを挙げ、

これら2点は英語の受身と共通していると述べている (p.116)。

(3d) 感謝状は少年の命を救った青年に [警察から] 贈られた。[受身文]

(3d) は (3c) と同様に対象物である「感謝状」を主語としてその視点に寄せて述べた文である。「警察から」という行為者を示す部分が省かれているが、このように行為者を省いた形も正しい受身文となる。このような形は感謝状を贈ったのが誰かということ、つまり行為者に対する関心がないか薄い場合、または行為者を表す必要がない場合、あるいは前後の文脈からそれが明白な場合に使われる。

(4a) 太郎君は一度も課題を提出しなかったために、不合格の成績をつけられた。

(4b) 太郎君は一度も課題を提出しなかったために、先生に不合格の成績をつけられた。

(5a) 新型コロナウイルスの感染拡大を阻止するために、全国に緊急事態宣言が出された。

(5b) 新型コロナウイルスの感染拡大を阻止するために、政府によって全国に緊急事態宣言が出された。

(4a) の主語は「太郎君」であり、行為者は明示されていないが前後の文脈あるいは状況についての知識によって行為者が「先生」であることは推測可能である ((4b))。また「緊急事態宣言」という事象を主語として持つ (5a) にも行為者は明示されていないが前後の文脈あるいは状況に対する知識によって、行為者として「政府」が適当であることが推測できる ((5b))。

2.2 有情の受身と非情の受身

表1は奥津 (井上編1989、田中 (2010) p.119より転載) に記されている直

表1 直接受身の4つの型 (奥津 (井上編1989) より) (田中 (2010) より転載)

〈主語 補語〉の 有生性	受身文	能動文	備考
〈++〉型	カルメンがホセに殺された。	ホセがカルメンを殺した。	視点の置き方の違い
〈+-〉型	太郎が風に吹き飛ばされた。	風が太郎を吹き飛ばした。	有生名詞主語が無標
〈-+〉型	源氏物語は紫式部によって書かれた。	紫式部が源氏物語を書いた。	?この手紙は母によって書かれた。
〈--〉型	橋が洪水に流された。	?洪水が橋を流した。	この型は非常に少ない。

注: +有生名詞、-無生名詞

接受身の4つの型である。〈++〉型は主語、補語共に有生名詞の場合、〈+-〉型は主語が有生名詞で補語が無生名詞、〈-+〉型は主語が無生名詞で補語が有生名詞、〈--〉型は主語、補語共に無生名詞の場合である。田中 (2010) は「日本語の受身は『人間中心』である」と述べ、〈--〉型は非常に少なく、あまり例がないとしている。

表1の〈-+〉型は2.1に挙げた(3c)、(5b)が該当し、これらは水谷(1985)が「欧文調」としているものである。

(3c) 感謝状は少年の命を救った青年に警察から贈られた。

(5b) 新型コロナウイルスの感染拡大を阻止するために、政府によって全国に緊急事態宣言が出された。

志波 (2012) は「受身文にとっては、主語が有情者か非情物であるかということがもっとも大きな構造のパターンの対立」(p.1)と捉えるという立場から、受動文を意味と構造的な特徴によって分析している。その方法として、主語と行為者の有情・非情の別で4つに大分類をし、その上で17の中分類にまとめている。その4大分類をまとめると表2のようになる。ここでは非情主語受身文の場合、有情行為者が文中に現れることがきわめて少ないため、「非情主語有情行為者受身文」ではなく「非情主語一項受身文」の項目が設定されている (p.17)。

表2 志波（2012）の受身文の4大分類（p.17より転載、一部追加）

主語	行為者	有情者	非情物
有情者		有情主語有情行為者受身文 ANガ ANニ V-ラレル[AA] (注1)	有情主語非情行為者受身文 ANガ INニ V-ラレル [AI]
非情物		非情主語一項受身文 (注2) INガ V-ラレル [II]	非情主語非情行為者受身文 INガ INニ V-ラレル [II]

注：AN: Animate Noun, IN: Inanimate Noun, V: Verb

一つ目の「有情主語有情行為者受身文」は主語に立つ有情者が与影者である動作主から何らかの動作ないし影響を身に受けるという意味を表し、話し手が動作主ではなく被動者（対象）に共感し、被動者の立場に立って被動者の視点から事態を述べるために用いられる（p.20）とし、次のような例を挙げている（(6) から (21) はすべて志波（2012）の例文）。

- (6) 私は和夫にそそのかされて、その本を買った。
- (7) 良子は、駅前で和夫に（後ろ姿を）見られた。
- (8) 和夫は逮捕された。
- (9) わたしはあなたに泣かれても困ります。

また、二つ目の「有情主語非情行為者受身文」は主に、主語に立つ有情者が彼／彼女をめぐる何らかの要因によって、普通でない心や身体の状態にあることを表す受身文である。

- (10) 私たちは、毎年、水害に悩まされる。
- (11) 和夫は悲惨な状況に置かれた。
- (12) 住民たちは移住を余儀なくされた。
- (13) 企業はコスト削減を迫られている。

三つ目の「非情主語一項受身文」の中心的な機能は動作主の存在を含意しつつ背景化し、「誰がやったか」ではなく「何が起きるか（起きたか）」に焦

点を当てること」である。ここには (17) のように、有情者の広義所有物が主語に立つ受身文も分類されている。

- (14) 国民の権利が平等化される。
- (15) 駅前にビルが建てられた。
- (16) 計画書には具体策が示された。
- (17) あの不明の襲撃者によって、私の後頭部が打たれたのである。

四つ目の「非情主語非情行為者受身文」は主語も行為者も物（もの）あるいは事（こと）といった非情物である。

- (18) 炎が風にあおられて燃え広がった。
- (19) この国は海に囲まれた島国だ。
- (20) 紫芋にはアントシアニンが豊富に含まれる。
- (21) 高度経済成長は東京オリンピックに象徴される。

3. 調査の方法

3.1 本稿で用いる用語

(3c)、(3d) のように無生物を主語とする受身の呼称は「非人称主語の受身」、「無生物主語の受身」、「無生名詞の受身」等があるが、これ以降、本稿では「非情の受身」という用語を使用する。同様に「有生」・「無生」と同義の用語として、それぞれ「有情」・「非情」を使用する。

3.2 調査の手順と分析の枠組み

本稿では村上春樹による短編集『めくらやなぎと眠る女』（以下『眠る女』）で使用されている受身の用例をすべて手作業で抽出した。今回は会話文も地の文も抽出の対象とした。次に、抽出された受身の主語(主部)と行為者それぞれについて有情性を判断して、4群に分類した。分類の基準は志波 (2012) を参考にしたが、若干の変更を加えた。2.2に記したように志波 (2012) は非

情主語受身文の場合、有情行為者が文中に現れることがきわめて少ないという理由で、「非情主語有情行為者受身文」ではなく「非情主語一項受身文」という名称を設定している。しかし本稿では文中に明示されていない場合でも前後の文脈から推測して主語及び行為者の有情性を判断することを優先するため、「非情主語・有情行為者の受身文」という用語を使用する。

したがって、本稿における分類は次の4群になる。

- [A] 有情主語・有情行為者の受身文
- [B] 有情主語・非情行為者の受身文
- [C] 非情主語・有情行為者の受身文
- [D] 非情主語・非情行為者の受身文

4. 分析結果と考察

4.1 受身の頻度とその分類

各短編の題名と、各短編に現れた受身の頻度は表3の通りである。

この603回の受身を主語と行為者の有情性によって4群に分類し、表4のような結果を得た。次に表4に関して χ^2 検定を行ったところ、主語の有情性と行為者の有情性には偏りがあることがわかった ($\chi^2(1, N=603) = 9.14, p=0.0025 < 0.01$)。

また、主語の有情：非情の割合は268回(44.44%)：335回(55.56%)で非情の方が多く、行為者の割合は有情445回(73.80%)：非情158回(26.20%)で有情の方が多かった。

4群で見た場合に頻度の多い順に並べると、[C] 非情主語・有情行為者の受身文 → [A] 有情主語・有情行為者の受身文 → [D] 非情主語・非情行為者の受身文 → [B] 有情主語・非情行為者の受身文となった。

行為者が有情の場合の主語には有情と非情の出現頻度に大きな違いは見られなかったが、一方で、行為者が非情の場合は主語も非情の場合が多いという結果になった。

志波(2012, p.17)は「非情行為者の受身文は生産性が低く、そのため、有

表3 『めくらやなぎと眠る女』に収められている短編の題名と受身の頻度

収録 順序	短編の題名	受身の 頻度 (回)	収録 順序	短編の題名	受身の 頻度 (回)
1	めくらやなぎと、眠る女	18	13	七番目の男	38
2	バースデイ・ガール	35	14	スパゲティの年に	10
3	ニューヨーク炭鉱の悲劇	20	15	トニー滝谷	31
4	飛行機—あるいは彼はいかにして詩 を読むようにひとりごとを言ったか	16	16	とんがり焼の盛衰	3
5	鏡	6	17	氷男	26
6	我らの時代のフォークロア—高度資 本主義前史	31	18	蟹	13
7	ハンティング・ナイフ	17	19	蛭	25
8	カンガルー日和	5	20	偶然の旅人	30
9	かいつぶり	7	21	ハナレイ・ベイ	42
10	人喰い猫	30	22	どこであれそれが見つかりそ うな場所で	32
11	貧乏な叔母さんの話	49	23	日々移動する腎臓のかたちを した石	40
12	嘔吐1979	13	24	品川猿	66
合計					603

情行為者の受身文に比べると、頻度も非常に低い」と主張しているが、本稿でも非情行為者の受身文と有情行為者の受身文は前者が158回(26.20%)、後者が445回(73.80%)となり、それを裏付ける形となった。

続けて志波(2012)は「有情主語有情行為者受身文と非情主語一項受身文は共に生産性が高く、頻度も高い」とし、その上で「有情主語受身文の代表的なタイプは有情主語有情行為者受身文、非情主語受身文の代表的なタイプは非情一項受身文である」と述べている(p.17)。3.2に記した通り、志波(2012)の類型における「非情一項受身文」は本稿における「非情主語・有情行為者受身文」と同等であるから、本稿での結果(有情主語・有情行為者受身文は214回(35.49%)、非情主語・有情行為者受身文は231回(38.31%))は、ここ

表4 主語と行為者の有情・非情別の頻度・期待度数・相対度数

			行為者		合計
			有情	非情	
主語	有情	頻度 (回) 期待度数 (回) 相対度数	[A] 214 (197.78) 35.49%	[B] 54 (70.22) 8.96%	268 44.44%
	非情	頻度 (回) 期待度数 (回) 相対度数	[C] 231 (247.22) 38.31%	[D] 104 (87.78) 17.25%	335 55.56%
合計		頻度 (回) 相対度数	445 73.80%	158 26.20%	603 100.00%

でも志波（2012）の主張を裏付けるものだとと言える。

4.2 各群の受身の例と考察

各群の受身の例を挙げながら、考察を加えていく。（部：受身、
_____部：主語（主部）、_____部：行為者）

4.2.1 [A] 有情主語・有情行為者の受身文（頻度：214回、相対度数：35.49%）

このタイプの受身の頻度は4群の中で2番目に多かった。

- (22) [J248] 私はどちらかというで大柄で、運動も得意でしたし、みんなに一目置かれていたからです。（「七番目の男」）
- (23) [J486] 私は床屋に行って髪を短くし、まとめて洗濯をしてズボンと色の合う靴下を履くようになった。それで誰かに後ろ指をさされる可能性は少しは減ったはずだ。（「どこであれそれが見つかりそうな場所です」）
- (24) [J576] 松中優子は前よりも深いまなざしでみずきの顔を見た。そんなふうに見られると、みずきは落ち着かない気持ちになった。（「品川

猿」]

- (25) [J314] トニー滝谷は暇さえあれば仕事をしていたし、これといって金のかかる趣味も持たなかったので、三十五歳になるころにはちょっとした資産家になっていた。人に勧められるままに世田谷に大きな家を買ひ、賃貸用のアパートも幾つか所有するようになった。(「トニー滝谷」)

(22)～(25)では主語、行為者共に人間であり、有情である。さらに小説というテキストの性質上、動物が重要な役割を持って登場したり会話をしたりする作品もある。そこで、どの作品においても動物が主語（・主部）あるいは行為者として現れている場合はすべての作品で有情に分類した（(26)、(27)）。

- (26) [J424] サチの息子は十九歳のときに、ハナレイ湾で大きな鯨に襲われて死んだ。(「ハナレイ・ベイ」)

- (27) [J329] べつの鴉が誰かが吐き出した菓子に飛びついたが、とんがり焼！と叫んでいた巨大な鴉に捕まって腹を裂かれた。(「とんがり焼の盛衰」)

主語あるいは行為者が受身動詞と同じ文中あるいは前後の文中に明示されていない場合は、前後の文脈や一般的な知識によって推測して有情／非情の判定をする必要がある。

- (28) [J593] 猿は前肢と後肢を、木製の椅子に細い紐で嚴重に縛り付けられていた。(「品川猿」) [推測される行為者：区役所の職員]

(28)は、この文だけでは行為者が不明であるため、文脈を読む必要がある。これは区役所で開かれている「心の悩み相談室」に通う主人公がカウンセラーと共に区役所の地下室へ降りていって遭遇した場面である。地下室に

はそのカウンセラーの夫である土木課長とその部下が、捕まえてきた猿と共にいる。実際に猿を椅子に縛り付ける場面は描写されていないが、この受身文に至るまでに状況が説明されているため、縛り付けた行為者は区役所の職員であると判断することができる。つまり、この場面に至るまでの文脈から行為者を推測する必要があるということである。

- (29) [J309] 少なくともそれがトニー滝谷が父親の口から聞いた話だった。滝谷省三郎がどれほど妻のことを愛していたのか、トニー滝谷にはわからない。綺麗で物静かな娘だったが、体があまり丈夫ではなかった、と父親は言った。

結婚した翌年には男の子が生まれた。子供が生まれた三日後には母親は死んだ。あっという間に彼女は死んで、あっという間に焼かれてしまった。非常に静かな死に方だった。何の葛藤もなく、苦しみらしい苦しみもなく、すうっと消えているように死んでしまったのだ。誰かが裏にまわってそっとスイッチを切ったみたい。(「トニー滝谷」) [推測される行為者：火葬場の職員]

(29) では、死んだ彼女を「焼いた」のが誰かは書かれていない。しかし、日本では死後は火葬場で火葬にするのが普通だという知識があれば、焼いたのが火葬場の職員であると推測できる。つまり、一般的知識が必要となるということである。

4.2.2 有情主語・非情行為者の受身文（頻度：54回、相対度数：8.96%）

このタイプは4群の中で頻度がいちばん少なかった。

- (30) [J205] 「川は涸れ、魚が死に絶えた」、あるいは「炎は森を覆い、鳥たちは焼き尽くされた」……我々は彼らの死を悼む。(「貧乏な叔母さんの話」)

- (31) [J179] エジプトの上空を飛んでいるとき、僕は突然何処かの空港で

自分のスーツケースが他人のスーツケースと間違えて持っていかれるのではないかという恐怖に襲われた。(「人喰い猫」)

- (32) [J181] 猫はずいぶん長いあいだそれを続けていた。まるで何かに取りつかれたみたいに、いつまでたってもやめなかった。ぴよんぴよんはねて、毛を逆立てたり、後ろに跳んだりしていた。(「人喰い猫」)

(30) の「焼き尽くされた」の主語は動物である鳥たち、行為者は炎であるので、有情主語・非情行為者受身文と考えられる。また、(31) の行為者は「恐怖」という感情であるが、感情そのものは非情と判断する。

次の(32)「取りつかれた」の主語は猫(動物)で有情と考えるが、行為者は「何か」と書かれている。この「何か」の解釈についてはこの小説の読者に判断が委ねられているわけだが、推測するならば説明のつかない超自然的な存在で、非情の存在と考えた。

4.2.3 [C] 非情主語・有情行為者の受身文(頻度:231回、相対度数:38.31%)

このタイプの受身はいちばん頻度が高かった。

- (33) [J278] ほとんどは風景画で、見覚えのある海や砂浜や松林や町並みが、Kらしい特徴のあるきっぱりとした色合いで描かれておりました。(「七番目の男」)
- (34) [J133] 彼らの会話は-もしそんなものがあつたとすればだが-おそろしく小さな声で交わされていたのだろう。(「ハンティング・ナイフ」)
[推測される行為者:彼ら]
- (35) [J136] 食堂から部屋に戻ったときも、いつもとは違って、彼らの部屋のドアはぴたりと閉ざされたままだつた。(「ハンティング・ナイフ」)
[推測される行為者:彼ら]

有情者の所有物あるいは身体の一部は非情と判断したため、(36) ~ (38)

のような例もこの群に入る。

- (36) [J584] 松中優子の名札はみずき自身の名札と一緒に封筒に入れられて、そこにあるはずだった。(「品川猿」) [推測される行為者：安藤みずき]
- (37) [J456] どんな曲でも耳にしたまま再現できるという彼女の特技は、様々な場所で高く評価されることになった。彼女はホテルのラウンジや、ナイト・クラブや、ピアノ・バーでピアノを弾いた。(「ハナレイ・ベイ」) [推測される行為者：ホテルのラウンジ、ナイト・クラブ、ピアノ・バーの経営者や客]

一般的知識をもって主語や行為者が推測できることもある。行為者が明示されていないが、(38) では美容師、(39) は出版社だということは容易に推測できるし、(40) も刑務所の看守であろうと推測できる。

- (38) [J505] 髪は短くカットされ、まんべんなく日焼けをしていて、頭のかたちがとてもきれいだった。(「日々移動する腎臓のかたちをした石」) [推測される行為者：美容師]
- (39) [J532] 彼の書いた短編小説は文芸誌の二月号に掲載された。(「日々移動する腎臓のかたちをした石」) [推測される行為者：出版社]
- (40) [J305] 処刑はいつも午後の二時に行われた。(「トニー滝谷」) [推測される行為者：刑務所の看守]

(41) ～ (43) の行為者はいずれも明示されていないが、それらを推測するといずれもその店や施設の従業員や職員ということになる。

- (41) [J008] 芝生の庭の先にはテニス・コートが何面かあったが、ネットは取り外され、人影も見えなかった。(「めくらやなぎと眠る女」) [推測される行為者：ホテルの従業員]

- (42) [J013]料理が運ばれて来るまで、いとこは窓の外の風景を---海やら、けやきの並木やら、スプリンクラーやら、さっきまで僕が見ていたのと同じ風景を、黙って眺めていた。(「めくらやなぎと眠る女」)[推測される行為者：食堂の従業員]
- (43) [J034] 窓からはライトアップされた東京タワーが間近に見えた。(「バースデイ・ガール」)[推測される行為者：東京タワーの従業員]
- (44) [J357] モルタル造りの母屋は、鮮やかなピンク色に塗られていた。(「蟹」)[推測される行為者：不明]
- (45) [J358] 高さ五メートルくらいのがらんとした倉庫みたいな部屋に何本もの横棒が渡され、そこにとんがり鴉がずらりと並んで待っていた。(「とんがり焼の盛衰」)[推測される行為者：不明]

(44) で母屋のペンキを塗ったのが家人か隣人か依頼された塗装工かは書かれていないし、(45) でこの部屋に横棒を渡したのが誰かも書かれていない。いずれも前後の文脈からも一般的知識をもってしても推測し得ない。しかし、これらの文脈では行為者には関心を持つ必要がない、つまり受身の行為者を明示する必要がないという例だと言えらる。

- (46a) [J173] でもその仕事が終わってしまうと、僕はなんだかひどく淋しい気持ちになった。自分にとってなくてはならないものが理不尽にうばわれてしまったような気がした。(「人喰い猫」)[推測される行為者：仕事の統括者]

(46a) では受身の主部は「自分にとってなくてはならないもの」という抽象的な事柄であるが、では行為者は誰なのかあるいは何なのかを判断するのは難しい。そこで(46b)のように前後を広げて読んでみると、この「仕事」というのは継続的に行われるものではなく、単発的なプロジェクトの類のものであると受け取れる。そしてこのプロジェクトやそれに関わる仕事全体を統括している人によって、意図的ではないにせよ、「自分にとってなくてはな

らないはずのものがうばわれた」と「僕」が感じていると考えることができる。

- (46b) [J173] イズミは僕より十歳若かった。彼女とは仕事の打合せの席で知り合った。そして我々は一目会ったときから、互いのことがすっかり気に入ってしまった。人生には、ごくたまにはあるけれど、そういうことが起こるのだ。僕らはその仕事の絡みで、それから二度か三度顔をあわせた。僕が彼女の会社に行ったり、彼女が僕の会社に来たりした。でも会うといってもそれほど長い時間一緒にいたわけではなかったし、我々二人だけで会っていたわけでもなかった。あるいはまたとくに個人的な話をしたわけでもなかった。でもその仕事が終わってしまうと、僕はなんだかひどく淋しい気持ちになった。自分にとってなくてはならないはずのものが理不尽にうばわれてしまったような気がした。そんな気持ちになったのはずいぶん久しぶりのことだった。(「人喰い猫」) [推測される行為者：仕事の統括者]

4.2.4 [D] 非情主語・非情行為者の受身文 (頻度：104回、相対度数：17.25%)

このタイプの頻度は4群中3番目であった。次のような例がある。

- (47) [J042] 雨が風に吹きつけられ、窓ガラスにあたって不揃いな音を立てた。(「バースデイ・ガール」)
- (48) [J356] 腰までの高さの煉瓦塀で囲まれた平屋建ての店で、背の低い椰子の木が何本か生えた庭に、木製のテーブルが五つばかり並んでいた。(「蟹」)

(47)の主語は「雨」、行為者は「風」でいずれも非情である。(48)も同様に主語、行為者共に非情であるが、この場合は主語の「店」という名詞を修飾する形で行為者「煉瓦塀」と受身動詞「囲まれた」がある。

- (49) [J238] はじめのうち、それは上手くいきそうに見えた。彼は昼食のローストビーフ・サンドとアスパラガスのサラダをうまくクリアした。環境が変わったことが良く作用したのか、それはきちんと彼の胃におさまり、やがてそのままきれいに消化されていった。[推測される行為者：消化器官] (「嘔吐1979」)

(49) は主語「それ」は食べ物で、「ローストビーフ・サンドとアスパラガスのサラダ」である。話し手は人間だが、食べ物は非情と考えられるため、非情主語とする。「消化する」行為者は明示されていないが一般的知識から推測すると「消化器官」ということになり、これは非情であるので、この群に分類した。これも、主語あるいは行為者が明示されていなくても一般的知識から推測できる。

- (50) [J337] そこにはただ過去がしっかり封じこめられているだけです。[推測される行為者：抽象的な存在] (「氷男」)
- (51) [J279] 夜が果てしなく続き、闇の分銅が耐えかねるほどの重さに積まれたころ、ようやく夜明けがやってきました。[推測される行為者：抽象的な存在] (「七番目の男」)

(50)の主語は過去という抽象的な事柄だが、行為者の特定は難しく、抽象的な存在と考えて非情行為者に分類した。そして (51) では「闇の分銅」という抽象的な表現が主部に用いられているが、この場合の行為者も (50) と同様に抽象的な存在だと考えた。

- (52a) [J128] 珊瑚礁に囲まれて、波というほどの波は立たなかったから、ブイはほとんど揺れることもなく、激しい太陽の光を受け、あきらめきったようにひとつのところに留まっていた。[推測される主語：?] (「ハンティング・ナイフ」)

(52a) は主語が明示されていない。この場合、前後の文脈からの推測が必要となる。

(52b) [J128] 沖合には大きなブイがふたつ、横に並んで浮かんでいた。波打ち際からブイまでがクロールで50ストローク、ブイとブイのあいだが30ストローク、泳ぐのにほどよい距離だ。ブイは正方形で、一辺の長さが四メートルくらい、それが双子の浮き島みたいなかっこうで繋ぎ止められている。

水は不自然なまでに透明で、上からのぞき込むと、ブイを係留している太い鎖や、その先のコンクリートのおもり石までくっきりと見えた。水深は三メートルから四メートルというところだろう。珊瑚礁に囲まれて、波というほどの波は立たなかったから、ブイはほとんど揺れることもなく、激しい太陽の光を受け、あきらめきったようにひとつのところに留まっていた。ブイの脇には金属製の梯子がついていて、表面には緑色の人工芝のようなものが敷き詰められていた。[推測される主語：湾または入り江] (「ハンティング・ナイフ」)

(52b) は短編「ハンティング・ナイフ」の書き出しの部分だが、これだけ前後を広げて読んでも「囲まれて」の主語は明示されていない。しかし、推測するならば「このブイが係留されている湾または入り江」ということになるだろう。

受身の主語や行為者は必ず受身動詞の近辺に置かれているとは限らず、受身動詞から離れた位置にある場合や、あるいは全く記されていない場合がある。前後の文脈や一般的知識から推測して主語や行為者を特定できるようになる必要があることを学習者に理解させ、そのような練習を積み重ねることが大切だと考える。

5. まとめと今後の課題

今回の調査では、次のことがわかった。

- (1) 主語の有情性と行為者の有情性によって分類した4群の頻度には偏りがある。
- (2) 4群で見た場合に頻度の多い順に並べると、[C] 非情主語・有情行為者の受身文→[A] 有情主語・有情行為者の受身文→[D] 非情主語・非情行為者の受身文→[B] 有情主語・非情行為者の受身文となった。
- (3) 主語や行為者が人間や動物、具体的な物体や事象でなく、抽象的な存在の場合もある。
- (4) 主語や行為者が明示されていない場合や、受身文から離れた位置に置かれている場合もある。そのため、前後の文脈や一般的知識から推測できる力を養う必要がある。

先行研究では「日本語の受身は人間中心」とされているが、今回分析の対象とした小説に含まれる受身文には非情の主語も非情の行為者も頻出していた。学習者が楽しみのために読む活動をより良くできるようになるために、非情の受身の教育を再考する必要があると考える。これを今後の課題としたい。

さらに、本稿では村上春樹の著作を分析の対象としたが、他の作家の著作にも分析の対象を広げて、今回の結果が普遍的なものかどうかについても検証をしていきたい。

参考文献

- (1) 奥津敬一郎 (1989) 『日本文法小辞典』 井上和子 (編)、大修館書店
- (2) 志波彩子 (2012) 『コーパスに基づく日本語受動文の実態』 「コーパスに基づく言語学教育研究資料5」 早津恵美子 (監)、東京外国語大学大学院総合国際学研究院グローバルCOEプログラム「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」
- (3) 高見健一 (2011) 『受身と使役 その意味規則を探る』 開拓社
- (4) 田中真理 (2010) 「第二言語としての日本語の受身文の習得研究—今後の研究の可能性—」 『第二言語としての日本語の習得研究』 13、第二言語習得研究会、114-146
- (5) 沼野充義 (2014) 「村上春樹 vs. カラマーゾフ - 現代日本の翻訳文化と世界文学」 『岡山大学文学部プロジェクト研究報告集「文化の交流、文化の翻訳」』 岡山大学文学部、

125-141.

(6) 水谷信子 (1985) 『日英比較 話しことばの文法』 くろしお出版

調査対象とした資料

村上春樹 (2009) 『めくらやなぎと眠る女』 新潮社